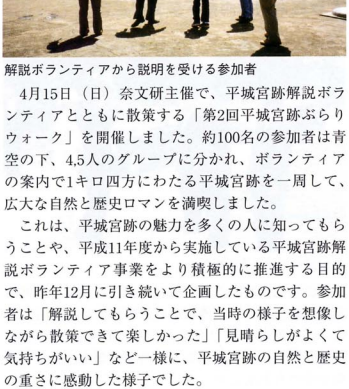
光谷室長から年輪年代法の内容や計測方法などが説明され、殿下は興味深く説明を受けられていた様子でした。

（管理課）

第2回平城宮跡ぶらりウォーク開催



解説ボランティアから説明を受ける参加者

4月15日（日）奈文研主催で、平城宮跡解説ボランティアとともに散策する「第2回平城宮跡ぶらりウォーク」を開催しました。約100名の参加者は青空の下、4,5人のグループに分かれ、ボランティアの案内で1キロ四方にわたる平城宮跡を一周して、広大な自然と歴史ロマンを満喫しました。

これは、平城宮跡の魅力を多くの人に知ってもらうことや、平成11年度から実施している平城宮跡解説ボランティア事業をより積極的に推進する目的で、昨年12月に引き続いて企画したものです。参加者は「解説してもらうことで、当時の様子を想像しながら散策できて楽しかった」「見晴らしがよくて気持ちがいい」など一様に、平城宮跡の自然と歴史の重さに感動した様子でした。

次回は秋に開催しますので、9月頃に参加者の募集をする予定です。

（文化財情報課）

文化財情報の公開及び見学情報

（飛鳥資料館）

春期特別展「遺跡を探る」

・会期　5月15日～7月1日

・開館時間　9：00～16：30（入館は16：00まで）

地中に埋もれた遺跡の有無、あるいはその大きさや性格を、掘り起こすことなしに推定することは、遺跡の保護、調査に携わる者にとっては、基本的な作業といえます。学術的調査を行おうとするにしても、土地開発に対応する事前調査を計画するにしても、まず地下の遺跡を把握する必要があるからです。このために、研究者が、対象となる土地の上をくまなく歩き回って、特徴的な地形や、地表に散った遺物の破片の分布などを調べるとか、崖面や掘削工事であらわれた地層を観察するといったやり方が行われてきました。

物理機器を用いた地中探査は、こうした従来の遺跡確認の手法を補い、さらに確実なものとする手段として研究がすすめられ、実際に応用されるようになったものです。探査の結果は発掘調査地区を設定したり、発掘の期間や費用の目安をたてたりするのに役立ちます。今回の特展では、普通は目にすることのない、大地比抵抗測定装置、磁気探査機、地中レーダーなどの遺跡探査機器の実物を展示、その作動原理を解説するとともに、写真やパネルやグラフを用いて様々な遺跡への実際の応用例を展示します。地中探査技術と考古学のかかわりに、いささかでも興味と関心とをもっていただければ幸いです。

電気探査

（第88回公開講演会）

・日時　6月16日（土）13：30～

・場所　平城宮跡資料館講堂

・定員　先着200名

「復原された東院庭園隅楼」箱崎和久

「よみがえる浄土世界－阿弥陀浄土院の発掘－」清野孝之

※聴講無料

（現地説明会）

○興福寺中金堂発掘調査

・日時　6月17日（日）13：30～

・場所　奈良市登大路町興福寺境内

○藤原京左京七条一坊西南坪（橿原市営住宅建設）発掘調査

・日時　6月30日（土）13：30～

・場所　橿原市上飛騨町

（平城宮跡のボランティア解説（無料））

国の特別史跡である平城宮跡をボランティアが解説します。

平城宮跡資料館や遺構展示館、復原された東院庭園、朱雀門など見どころ満載、ぜひ平城宮跡の壮大な歴史に触れてみて下さい。

（各施設休館日（月曜、（月曜が祭日の場合はその翌日））

・備考　団体（20名以上）は事前に申し込んでください。
申込先：文化財情報課（内線208，219）

研究室紹介

毎回2研究室を順次紹介していきます。

建造物研究室（文化遺産研究部）

これまで孤立していたかのような建造物研究室は、この4月に新しい組織になって生まれた文化遺産研究部に所属する三つの研究室のひとつとなりました。現在のところ人に移動はなく、研究のめざすところや役割も以前から定まっていて変化はありません。けれども取り組み方には変化があります。独立行政法人化にあたり5ヶ年の研究計画と予算計画をたて、この目標にそって活動することになったのです。

5ヶ年計画に挙げた研究は大きく分けてふたつあります。

ひとつは、古代から近世に至る伝統建築、集落・町並み、近代建築、近代化遺産など、歴史的建造物全般の基礎調査とその保存修復についてであります。とくにこの5ヶ年の間に、これまで続けられてきたわが国の歴史的建造物保存修復の考え方や手法を明治期までさかのぼって探り、これからの保存に活かすために分析してその結果をまとめることにしています。

もうひとつは、文化庁が奈文研から替わって直接おこなう平城宮第一次大極殿および大極殿院の復原事業に対する学術面の指導・助言、さらにはそれらの基盤となる古代建築の総合研究です。復原事業はまさにこれからが本番で、設計や施工段階での細部の研究から復原の具体的な方針にいたる検討などの場面では、これまで研究をおこないながら復原事業をすすめてきた奈文研の研究者の参加がますます必要となります。

五分の一構造模型による復原第一次大極殿の検討

建造物研究室はこのような研究を活かし、地方自治体が実施する建造物の基礎調査、集落・町並み調査、近代化遺産の調査などに参加するとともに、建造物の保存修復事業や遺跡の建造物復原事業にも関わっています。

研究室は技官2名と奈良県から文化財修理技師を迎えた3名体制ですが、他の部局の5名と韓国から受け入れた研究員1名を加え、全部で9名が建築関係研究者として活動しています。

考古第一調査室（平城宮跡発掘調査部）

平城宮跡発掘調査部では、平城宮の発掘調査をすすめるだけでなく、平城京内の宅地や寺院についての発掘調査も行っています。本年度から、考古研究部門3室、建築・庭園研究部門で1室、文献史研究部門1室の5調査室体制になり、それぞれ整理研究を分担しています。各調査室つまり、各専門分野のメンバーがチームを組んで知恵を出し合いながら、議論しながら一つの遺跡の発掘調査をすすめていくことが、創立以来の当研究所の基本的な精神であり、世にいう「学際的」な研究をはるかに先取りしてつくりあげられた調査研究体制を継承しているところに、奈良文化財研究所の大きな特色があります。これによりこれまでにさまざまな成果を積み上げてきていることを忘れてはなりません。

発掘調査では様々な遺物が掘り出されるが、瓦と土器を除いたさまざまな出土品の整理、研究を担当しているのが考古第一調査室です。木を使って作られた実に多様な木製品、砥石、石器、宝玉類などの石製品、銭貨、鏡、帯金具などの銅製品、鎌や鋤や刀の刃あるいは釘、かすがいなどの鉄製品、樹木、草本、種子などの植物遺体、馬、牛などの骨などなど、往時の生活文化のありようを明らかにする鍵となるさまざまなモノを研究対象としています。このような多種多様な遺物を取り扱っていることから、整理、分析をすすめるには幅広い知識が要求されることになります。現在研究員は室長以下4人のメンバーであり、また遺物の洗浄からはじまり、コンピューターを駆使した膨大な質量のデータ整理にいたるまで、頼もしき4人の女性陣の支援を受けながら調査研究が続けられています。